アーキビストと通信ネットワーク - 日本における現況-

毛塚万里*

Kezuka Mari

はじめに

図書館をはじめ、博物館、美術館、資料館 など、国内における文書館の類縁機関周辺で は、インターネット上にホームページを公開 し、世界中の利用者に向けて自らの組織情報 を提供する試みが少しずつ増えている10。だが その内容は、自館の利用案内や企画展ガイド といった広報主体であり、まだ限定的な利用 が多い。ひるがえってパソコン通信に目を向 けると、商用ネットを中心に、アーキビスト やアーカイブズの日常業務と関わる情報を集 積する場・議論の場が着々と増えている。筆 者は、昨年の全史料協和歌山大会の自由テー マ研究会で、沖縄県立公文書館の富永一也氏 が提案された「ネットワークで育てようアー キビスト」の司会に指名されたことがきっか けで、国内の類縁機関とその周辺で通信を利 用する「職能ネット」の状況を調べ、あわせ て報告する機会を得た「文献01・02」。本稿は、 多くの協力者を得て収集したその時の情報を、 以後の新たな動向を補足して、通信未体験者 を含む多くの方々と共有する意味でまとめた ものである。

以下、主として商用ネット㈱NIFTY-Serve 上に展開するアーキビストやアーカイブズに 関連する情報や意見交換の場を紹介し、日本 におけるサイバースペースの利用について現 状報告したい。

1. NIFTY-Serveとその提供サービス

筆者が会員登録している㈱NIFTY-Serve (ニフティサーブ、以下ニフティ)は、富士 通と日商岩井が出資して1987年に開業した大 手商用ネットで、日本最大の会員数163万人 (1996年3月末現在、うち法人会員は3割) を擁する2。そのなかで、情報交換や議論の場 として公開利用されている場は、主として「フ ォーラム | 内の「電子会議室 | (以下会議室) と呼ぶ場である3)。会議室には、そのフォーラ ムのテーマに沿ったものが最大20まで開設さ れ、新設や増設、統廃合など、時宜にあった 見直しが繰り返される。フォーラム内には会 議室のほか、「掲示板」や「データライブラリ」 と呼ばれる"施設"もある。「データライブラ リ」には、ログファイルと呼ばれる、過去に 交わされた発言記録や臨時会議室記録、会員 が自主的に登録した各種のデータファイル(た とえば図書館フォーラムの場合は「国立国会 図書館法」や「学校図書館法」がある)が保 管されている。フォーラムは、だれもが一次 利用で気軽にのぞけるものもあれば、入会手 続きをしないと体験参加すらできないものも ある。発言者は、実名を公表する人、「ハンド ル名」という匿名を使用する人、実名と匿名 を併記したり使い分けたりする人などに大別 できる4。各フォーラムには、様々な企画や場 の維持管理を担当する「シスオペ (システム

*けづか まり:国文学研究資料館史料館(国立史料館)

Kezuka Mari: Department of Historical Manuscripts, National Institute of Japanese Literature

オペレーター)」や「サブシス」と呼ばれる世話役がおり⁵⁾、それぞれの場が円滑に利用されるように、助言や指導を担当している⁶⁾。

「ホームパーティ」と「パティオ」と呼ばれるもう一つの場は、会員個人が廉価な利用料金で自由に設定できるニフティ固有の提供サービスであるⁿ。どちらも会員自身が自由に瞬時に開設できて、一般会員からは存在が見えない場だ。設定者から開設の案内とパスワードを知らされた者以外は利用できない。つまり設定者の承認者=素性を知ったメンバーだけが参加する場となるため、参加者は仲間内だけのオフレコを時には交えながら、比較的自由に発言(書き込み)することができる。

「ホームパーティー」は、メールサービスの一種で、蓄積(登録・書込)可能な最大分量1,000行を超過すると、古い順に消えていく。一方最大発言登録数512の収納力をもち、「パティオ」は、フォーラムの電子会議室と同じ機能を持つ。関連発言に対し、後からコメント登録できる機能や、発言の読み方、画面表示方法などが好みに応じて選べる。ただしライブラリ機能はない。

会議室もホームパーティやパティオも、どれも参加者全員が発言しているわけではない。また発言が義務付けられているのでもない。したがって、アクセスはするけれど読み手に徹する人については、他の参加者は人数さえも全然認識できないままである。

NIFTY-Serve上のアーキビスト・アーカイブズ関連の場

1996年7月1日現在、筆者が把握している 国内におけるアーキビスト・アーカイブズの 業務に関わる情報サイトは、表1のとおりで ある。ニフティ上には表に取り上げた8件の ほか、芸術フォーラム (FART) 18番会議室 「総合情報会議室」で展覧会案内・美術館博 物館情報・本の紹介・Web情報を、同4番会 議室で修復と保存に関する話題を取り扱って いる。また建築フォーラム・デザイン館 (FARCD)の11番会議室「古建築研究室」でも、 地域の文化財情報を扱うほか、歴史系以外の 博物館、記念館情報を扱う場もある。ちなみ に電子化された資料の標準化と関わる情報の 場はかなり多く、ここでは省略した。

ニフティのような商用ネットを利用せず、独自にホストを設けて運営しているネットワークが、奈良国立文化財研究所の「奈文研ネット」である。ここには国内外各地の埋蔵文化財やその周辺の情報、保存科学、情報機器利用の情報が集約されている。「草の根」とはいいながら、ニフティのフォーラム9つ分に匹敵するような規模と内容である。「シスオペからのお知らせ」で過去ログをみれば、情報管理から定期メンテナンスまで、運用サービスをめぐる主催者側の負担を追体験することができる。

ニフティを利用するケースでは、フォーラム内の会議室利用が4件、パティオ・ホームパーティ利用が4件である。パティオ・ホームパーティ利用の場合、会員限定のJADS-HPを除くと参加資格は不問であり、当該テーマに関心を持つ人ならば参加可能の原則になっている。

2-1 情報収集と相互協力

ネットワーク上には、あちこちに色々な情報が分散している。しかしながらパソコン通信では、Webのホームページのように、各会議室間に「リンク」(関連情報へ瞬時に移動できる機能)をはることができない。しかも商用ネットの世界では、発言者の著作権をはじめ、さまざまなレベルの著作権が錯綜しているため、利用時には厳密に配慮することが義務となっている。ものによっては、発言者や開設者の承諾を得るだけでは済まない場合もある。情報を気軽にその場から持ち出さないことについて、ネットワーク利用者は常に意識化し、情報利用時のルール(ネチケットと称される)として相互協力している。

会員の多くは、興味あるテーマと関連する 会議室やパティオ・ホームパーティに重複ア クセスする。そのため通信トラフィックを回 避する意味でも、関連する場すべてに同一情 報を書き込む「マルチポスト(又はクロスポ

表1 アーキビスト・アーカイブズ関係サイト

注記のあるもの以外は1996年6月末現在のデータである。

No.	名 称	運用形態	対象・目的	解説年/担当者等 /利用状況	既存メディアとの関係	備 考	参考情報
1	史料情報の電子 化と標準化を考 えるバティオ	ニフティ パティオ	歴史学や文学など広く人文 学の素材となる歴史的資料 の電子化とそれを流通させ るための標準化に関する問 題点やこれからの展望につ いて,気楽に情報や意見を交 換するため	1995.1. * 田良島 哲約40名		• 1995.1.から開設したホームパーティを翌年からパティオに拡充	文献05
2	アーキビストの ホームパーティ	ニフティ ホームパーティ	アーカイブズや史料保存に 関する研究会等情報の集約 する場として、あるいは現役 アーキビストのみならず、ア ーカイブズに興味関心をも つ方、アーキビスト志願者、 学生、文書館以外の職場に 勤務する方たちの交流の場 として	毛塚万里	通信を利用できない 同窓会参加者のため に,同窓会報に利用 状況の概要を掲載	史料館主催史料管理学研修 会の同窓会メンバーを対象 に準備室としてスタート。 全史料協和歌山大会自由テ 一マ研究会(富永一也氏会枠 き越えたメンバーが参集す る場となる、1996.5.7から 「準備室」をはずし、現名称に	文献06
3	「しゅうふく事情」オンライン (Shufukujijyo ON LINE)	ニフティ ホームパーティ	修復に関心のある,全ての人 に,講演会,セミナーなど,文 化財の修復,保存に関した様 々な情報を,より迅速に提供 すること	1996.5. 山岡 寛 約30名	通信を利用できない 人のために、ペーパー メデイアの「しゅう」 く事情」と連携し、期間を区切り、抜粋した情報を掲載予定	当分の間は限定利用(電子 掲示板的利用)『しゅうふく 事情」とは、尾立(おりゅう) 和則氏が修復技術者のネットワークづくりのたなり 編集・発行をはじめたコーズレターで、修復技術者となっ、 に、1994年から代表者とユーズレターで、修復技術事等の切り抜きを割を果たしっかた 情報誌の役割を果たしっなく事情〕22号は18頁35件を収で 12回の発行物を購入35件を収で 12回の発行物を購入35件を収で 12回の発行物を購入40円 12回の発行物を購入6年を考 となる」では匠をよる、メットで配布する協力体制をととなっとる。	文献07
4	アート・ドキュメ ンテーション研 究会ホームパー ティ (略 称:JADS - HP)		JADS研究会会員相互の意 見交換,情報交換を促すこ と	1996.7.1 同会会員交流委員 会(担当3名) 20名*	『JADS通信』上で 関連記事掲載予定	同研究会会員専用.発言は本名記載を義務.参加希望者は,研究会に加入すればアクセスを承諾.*(1996.7.末現在)	文献08
5	生涯学習フォーラム・総合 14番会議室[図書館フォーラム (情報館)] 同15番会議室 「図書館フォーラム(トーク館)]	ニフティ 電子会議室	図書館の専門家のためのフォーラムではなく、図書館に関心を持つ全ての人のフォーラムとして、図書館に関心を持つ全ではなり、図書館を作ろうとしている人、図書館職員になろうとしている。「図書館に要ない。 図書館に要ない。 図書館に要ない。 図書館に関いている。「図書館」というキーワードで語り合う場であり、図書館に関する話題を交流・交換し、より図書館をあり、図書館に関するまのにとていくために企画	発足時スタッフ5名	『図書館雑誌』連載 ネットワーク利用が イド	*3/31までの発言数は3806. 下記臨時会議室が2つ開設されている。 1994.11.5-12.31「インターネット活用会議室」(発言数164) 1995.1.28-4.30「阪神・淡路大震災の会議室」(発言数101) 1995.10.からJLA情報管理委員会パソコン通信ワーキンググループが情報提供を開始、1996.4.4から2会議室体制	情報01,02,03 ,04 文献10,11,14 ,15
6	歴史フォーラム ・本館 16番会 議室[PRO/情 報知識学会]	ニフティ 電子会議室	学会の連絡の場としてだけ でなく,学会員と一般の人と の交流も目指す.		情報知識学会ニュー ズレターに、会議室の 活用を随時掲載.ニ フティ非会員で事務 局へメールアドレス を登録した会員には、 会議室のログをメー ル転送.	Webのホームページも年 2 ~ 3 回路時開設 http:// www.toppan.co.jp/	情報05,06

表1 アーキビスト・アーカイブズ関係サイト (続き)

No.	名 称	運用形態	対象・目的	解説年/担当者等 /利用状況	既存メディアとの関係	備考	参考情報
7	歴史フォーラム ・本館 17番会議室 「NIFTY電子 文書館一設立準 備会議室-」	ニフティ 電子会議室	電子文書・電子資料として作り出された膨大な資料(史料)の保存・管理・利用法の問題など、様々な問題を議論し、「NIFTY電子文書館」の設立に向けての第一歩となるべく「準備会議室」として	1996.4. 発言数:24		具体的には以下の事柄を対象として「電子文書館」の素型を構築する。(1)(㈱ニフティの社史編纂のための基礎史料の収集/保存(2)コンピュータネットワーク NIFTY-Serve史編纂のための基礎史料の収集/保存(3)歴史フォーラム(FREKI-SHI)および歴史学および関連諸分野を対象とするエリア(PATIO/HP/INTERNET の MAILING LIST など)の記録の収集/保存(4)[電子文書館]の明確なイメージの記録の収集/保存(4)[電子文書館]の明確なイメージの形成と構築方法の検討(5)上記(1)ー(4)達成のための情報交換の場(音子会議室)と、史料の蓄積の場(データライブラリ)の開設と運用	情報07,08 文献19
8	歴史フォーラム ・本館 7番会議室[地域 の歴史と文化 財」	ニフティ電子会議室	扱う対象:(1)日本全国にある有形・無形文化財の紹介 会画/彫刻/工芸品の建造物/古文書・典籍/歴史資料/考古資料/民俗資料/保俗資料/有形・無形/史跡/天然記念物/技術(いわゆる「人間国宝」」など、「目」でみた文化財の情報(2)で開いた文化財の情報(2)で開いた文化財の情報、で開いた文化財の情報、で開いた文化財の情報、で開いた。 護法/条例などの情報、存在財保、政化財、企業の主に、の文化財・実跡の保備、会別の定に、の情報、存活第一行に関する情報、博物館/公文書館施設公的機関や私かの紹介、自治体史の編纂/刊行に関する情報、海物館/公文書館施設公的機関や私ため、現まなければならない情報、の情報など公的機関や私たちが現実の課題として取り組まなければならない情報、(3)「阪神波路大護災」関係の情報	1996.2. * 発言数:660		・1995.4.に開設した7番会 議室地域史」と15番会議室 で取り扱った「阪神淡路大 護災」関連の情報を吸収合 併し、1996.2.に再編成して スタート	情報09,10
9	奈良国立文化財 研究所文化財情 報ネットワーク (略称:奈文研ネ ット)	独自 対応VAN: Trip-P (NABUN- KEN)	国および地方公共団体の文 化財行政担当職員・研究者、 大学の文化財関係諸学の研 究者などの全国の文化財関 係者が、情報や意見を交換 するため.	1991.5. 奈良国立文化財研 究所(森本 晋) 会員数:文化財関 係者225名 (1995.1.現在)		ゲストでログイン可. 実名使用.1日平均利用者は平均り 日2.3件.現在のメニューマップは,下記の9部門から成り,さらにその中が各知ら(ご案内と問い合わせ)2.方法論3.文化財一般(時期時代別の話題)4.文献(報告書などの紹介と問い合わせ)5.情報機器の利用6.雑談室7.電子メル8.データのご案内(inf)(以上1995.11.現在)『月刊文化財発掘出土情報』のジャパン通信社との協力関係あり	文献21,22,23

表 2 LISTSERVE lists

AAT-L	AAT-L@UICVM.UIC.EDU	Art & Architecture Discussion List		
AMIA-L	AMIA-L@UKCC.UKY.EDU	Association of Moving Image Archivists		
BIBSOCAN	BIBSOCAN@UTORONTO.BITNET	Bibliographical Society of Canada		
BOOK ARTS-L	BOOK ARTS-L@LISTSERV.SYR.EDU	The Book Arts:binding,typography,collecting		
CIDOC-L	CIDOC-L@FREESIDE.NRM.SE	CIDOC Distribution List		
ERECS-L	ERECS-L@UACSC2.ALBANY.EDU	Management and Preservation of Electronic Records		
EXLIBRIS	EXLIBRIS@RUTVM1.RUTGERS.EDU	Rare Books & Special Collections Forum		
MUSEUM-L	MUSEUM-L@UNMVMA.UNM.EDU	Museum discussion list		
ICOM-ANNOUNCE	ICOM - ANNOUNCE@FREESIDE.NRM. SE	ICOM Announcements Distribution List		
ICOM-SWEDEN	ICOM-SWEDEN@FREESIDE.NRM.SE	ICOM Sweden Distribution List		
IMAGELIB	IMAGELIB@LISTSERV.ARIZONA.EDU	IMAGELIB		
PRESED-L	PRESED-L@UICVM.UIC.EDU	ALCTS Preservation Course & Workshop Instructors Discussion +		
ROCK-ART	ROCK-ART@ASUVM.INRE.ASU.EDU	Rock art Discussion and Information		
TEXTILES	TEXTILES@VM3090.EGE.EDU.TR	Textiles & Clothing Studies Discussion List		

ストとも) はできるだけ避けるエチケットが ある。それゆえ、当該テーマに密接な内容で 出典と明示しても、会議室に書き込まれた情 報を、他の会議室やパティオ・ホームパーテ ィにそっくり転載することはあまりしない。 多くの場合は「○○会議室の○番発言をみて ください」のように、最小限の内容紹介と所 在情報を示す場合が通例で、詳しくても部分 引用ぐらいである。

このように各所に分散所在する必要な情報 は、それぞれの関連サイトまで自分で取りに ゆかねばならない。そのため複数の会議室や パティオ・ホームパーティにアクセスを望む 場合は、能率とコストダウンの理由から、自 動巡回機能 (オートパイロット) という設定 を利用する人が多い。自動巡回にすれば、情 報収集漏れは防止できる。反面、発言数の多 い会議室をいくつも巡回すると、膨大なログ から情報を取捨選択する作業に追われてしま う。必要情報の見落し防止策はなかなかたい へんだ。

筆者が把握する範囲での各スペース間の連 携状況は、アート・ドキュメンテーション研 究会(以下IADS)が、担当幹事が関連する会 議室やパティオ・ホームパーティすべてに情 報提供を行っている。また筆者が入手した保 存関係の情報は、アーキビストのホームパー ティに登録する「電子版」を、「しゅうふく事 情オンライン」所定フォーマットに加工し、 事務局山岡氏宛にメール送信する"再利用" を行っている。フォーラムの会議室に書き込 まれた関連情報については、網羅すること自 体が負担になる。同じ場に集うメンバーが、 どこを自動巡回しているか把握もしていない。 関連情報のアナウンスは、参加者それぞれの 自発性にすべてまかせている場が大半である。

フォーラムという公開の場を利用しながら、 協会や学会が組織として正式に運営を支援し ているのが、図書館フォーラムと情報知識学 会の会議室である。次にこの2つの動きを中 心に、それぞれの場の活用状況をみていこう。

2-2 図書館員周辺のうごき

図書館員による通信利用は、1990~1991年 頃、まず関西在住の図書館員が中心となり、 ホームパーティ「図書館員の談話室」を開設 したことにはじまる[文献09]。図書館員また は日本図書館協会会員という参加条件で、ス タート時7名。「資料室」の臨時開設などを経 て、1994年初めには参加者14名に達した。そ の中のメンバーがスタッフとなり、1994年9 月に「図書館フォーラム」が実現した「文献 16.17]

間、日本図書館協会(以下JLA)の情報管理 委員会と連絡はとりつつも独立運営だった。 やがて1995年10月24日から、JLA事務局によ る広報提供が試行され、会員消息、求人・求 職情報、ILA訃報、資料保存委員会の月例研 究会などの研究会情報、各図書館催し物や新 刊情報など、機関誌『図書館雑誌』掲載予定 情報の提供が実現した。その後1996年4月に は2会議室体制となり、講演会やセミナー等 の各種イベントの案内、新館案内、書籍・AV の紹介等々、図書館に関係する様々な情報を 交換する「図書館フォーラム情報館」と、従 来の「図書館フォーラム」を継承し、図書館 に関する意見交換を行う「図書館フォーラム トーク館」に分割された。

ILAの情報管理委員会でパソコン通信を取 り上げる理由は、JLAを身近に受け取っても らう目的以上に、レファレンスに代表される 図書館のサービスに活用できる重要な道具と して位置づけられる時代になりつつあるから だという。パソコン通信の図書館サービス上 での有効性が明確になれば、JLA独自のフォ ーラムを近い将来つくることを検討している 「文献15]。

『図書館雑誌』を利用する形で、情報管理 委員会パソコン通信ワーキンググループは、 ニフティIDの取得方法の広報活動にはじまり、 入門講座の連載など、通信ビギナーに対して 実にきめ細かいサポートを実施している「文 献12·14·15]。

パソコン通信だけではない。インターネッ トもどんどん利用している。全国図書館大会 用のホームページの臨時開設「文献11」、大学 図書館関係者のレファレンス研究分科会有志 によるメーリングリストの開設などがこれま でに実現し、個人でホームページを開設する 人もいる8)。

インターネットを利用するメーリングリス ト (Mailing List,以下ML) とは、電子メー ル・システムを使って特定のグループ内に情 報を流通させるしくみである。MLのグループ

図書館フォーラムは、開設からしばらくの はテーマごとに作られ、管理者にメールを送 信すると、自動的にそのグループ全員にメー ルが配信される。富永氏が自由テーマ研究会 で報告されたアーキビストのMLのほか、国内 外には多様なメーリングリストが存在し、利 用されている(表2)%。意見が活発なグルー プだと、2、3日留守にしたらメールボック スが満杯という事態も発生するという。MLは 商用ネット経由でも加入できる。久しぶりに 会議室へアクセスしたら、興味ある講演会が 終わっていて悔しかったという事態の予防に は有効だろう。自分から情報にアクセスしに 行かずに済むことが何よりも魅力だ。

2-3 ニフティ会員外へのサポート

情報知識学会の場合でも、ニフティやイン ターネットのメールアドレスを有する事務局 登録者数は、会員全体の約12%に過ぎないと いう。そのため、二フティに参加できない多 くの会員のために、別の手段で会議室情報を 提供している「情報06]。

まずニフティ会員ではないが通信環境を持 つ人に対しては、"手動ML"、つまり事務局が 一定量のログを定期的に人力で送信している。 通信手段をもたない会員に対しては、従来ど おり、印刷物の会報を用いて、会議室の様子 を報告している。

図書館フォーラムの場合は、情報提供とい う範囲限定の協力関係であるため、『図書館雑 誌』上で、図書館フォーラムの動向が詳細に 報告された前例はない。

JADSの場合はスタートしたばかりだが、ニ フティ会員外の通信環境を持つ人に対しては、 やはり"手動ML"を実施する予定だ。また会 報を利用して何らかのサポートを行う計画を 検討中だという [文献08]。

2-4 研究会での利用例と可能性

研究会の開催と通信利用の参考になる事例 は、昨年9月に開催された情報知識学会(以 下PRO) 人文·社会科学系部会主催の「第5 回歴史研究と電算機利用ワークショップ」で ある。まず開催の約1ケ月前に発表要旨が書 き込まれ、出席予定者は予習してから参集す

ることができた。発表要旨の配布が会場だけ に限定されなかったため、当日参加できなか った人も、ワークショップ終了直後からスタ ートした議論の輪にスムーズに参加していた。 開催後には、報告者から補足が寄せられたり、 コーディネーター3氏から報告レポートが順 に書き込まれ、それを契機に話題が随時広が り、意見交換が活発化した。短時間の質疑応 答では実質的な議論ができないままで終わっ てしまうが、通信のおかげで、より深い議論 が可能になったことを千速敏男氏が指摘され ている「文献18]。

速報性のメリットは認めるが、情報の共有 化を実現する点では、紙か、通信か、単にメ ディアの違いだけではないかと疑問を抱くか もしれない。

ネットワーク上での呼びかけは、日頃その 学会や組織と全く縁のない世界にいる会員外 の者にとっては、会員中心に限定配布の会報 ・会誌での呼びかけ、すなわち紙に固定され ている状態に比べ、必要な情報に接するチャ ンスを格段に増大させるといっても過言では ない。PROの会議室利用はニフティ会員限定 とはいえ、24時間、だれもが自由にアクセス し、その会の過去から現在に至るまでの生き た活動状況を瞬時に把握できる。大まかな活 動概況を知りたいだけなのに、会誌のバック ナンバーの保持者や閲覧施設探しに不毛な時 間と労力を費やすことも解消する。関心のあ る人が議論に参加する機会を得やすいことは、 広報効果への期待だけではない。会員という 枠を越えた、業際的・学際的な幅広い意見交 換の場として発展する可能性にも期待できる のである。

2-5 電子文書館準備室

「1980年代以降、コンピューターネットワ ークのなかで膨大な文字が消費され、消えて いきました。そこには貴重な史料も含まれて います。(中略)しかしはじめから電子文書・ 電子資料として作り出された膨大な資料の保 存・管理法はまだ全くといって話し合われて はいません。これらが保存されていかなけれ ば、この80年代以降の歴史は空白のものと成 りかねないほど重要な事であると考えます。 「情報07」という危機感から、歴史フォーラ ムのシスオペ諸氏が中心となり、電子文章館 準備室は発足した。ニフティを拠点としなが らも、扱う対象はニフティの枠を越えた内容 をめざしている [情報08,文献19]。

昨年、ディアスタイン氏が『記録と史料』 第6号に自主寄稿された「アメリカ合衆国に おける州政府の記録・史料管理プログラム」 では、米国の記録管理担当者やアーキビスト たちの問題関心として、所蔵史料のオンライ ン利用の保障とともに、コンピュータ記録に ついての問題が広く認識されることが示され ていた。コンピュータ記録に関しては、利用 するためのハード・ソフトなどシステム上の 問題を伴うことから、文書館で作成した長期 保存と利用のためのガイドラインに沿って、 記録作成機関自身が記録を保存することを強 く求めるプログラムも一部の州にはあるとい j (pp.27,29)

その流れでいくと、二フティ自身がアーカ イブズを持ち、専門担当者を配置して、確実 に記録を将来に残す取り組みをはじめること は歓迎すべき動きだ。とはいっても、長期保 存と利用のためのガイドラインの提供も、助 言をするノウハウも、全史料協ではまだ持ち あわせていないのではないか。だが避けては 通れない問題だ。情報知識学会、記録管理学 会、企業史料協議会など、関係諸団体の動向 も視野に入れながら、一緒に協力しあえる場 として活用していけることを期待したい。

国文学分野における情報拠点のひとつ、国 文学研究資料館が開設したホームページ上に は、電子化情報の共有化をめぐる諸問題のな かで一番ホットなテーマである「SGML」「漢 字および漢字コード」について意見交流する 場が用意された[情報13]。このように、その 研究分野や業界をリードする立場の組織が、 議論の場を提供するのが理想なのかもしれな い。しかし商用ネット利用にしろ、インター ネット利用にしろ、開設運営していくには、

それなりの体力が必要である。日本のアーカイブズ団体を自認する全史料協は、そういう受け皿を用意する体力を残念ながらまだ持ち合わせない。しかし、歴史フォーラムのスタッフである石田文一氏から協力要請は望まれている。地域の草の根ネットも多い。ミニコミ誌でも、最初から最後まで電子媒体という資料が出現しはじめる時代が到来した [20]。地域史料も電子媒体と決して無縁ではない。日本のアーキビストも、本格的に目をむけはじめなければならない時期が来ているのである。

3. むすびにかえて

3-1 Webか?商用ネットか?

ICAのホームページにアクセスすれば、ISAD (G)やISARRの原文ファイルがだれでも自由に利用できる[情報14]。アーキビストのためのSGML情報¹⁰⁾も、日本にいながら最新版が入手できる[情報15]。第三者に情報提供することも自由だ。だが商用ネット上の「公開」情報は、業務上有用な内容だからといって会員外の人に自由に回覧することはできない。それが自由な利用を前提としたWebによる情報交換や発信との違いであり、商用ネットが提供する場を利用したネットワークの限界だといえる¹¹⁾。

しかし私たちの職場の現実は、インターネットがストレスなく業務利用できる環境はおろか、ネットワーク接続さえも希有だ。それでも必要を感じ、カタカナにも機械にも強くない純"文系人間"自認者が覚悟を決め、独力で恐る恐る通信に手を染めはじめる。10年前からパソコンと親しむベテラン組ではない通信利用者が確実に増えつつある昨近、通信経験の浅い個人でも比較的参加しやすい商用ネットの利用は、現実的で賢明な選択だと思う。

3-2 メリット、デメリット

通信機能内蔵のパソコンやワープロが急速 に普及しはじめている。それでも通信が利用 できる人は全国でもひと握りであり、一般的 に利用されているメディアではない。したが って、ネット上の発言や情報も、全体からみれば過半数の意見ではない場合もある。通信を利用できる者とできない者との「情報貧民」を懸念する声もある [文献27·28]。個々の情報は、発言者 (発信者) 自身の責任で自主的に行う活動であり、発言の場の提供者が個々の情報の内容を保証したり責任を持つわけでもない。つまり無批判的に受容するのではなく、必要なもの、曖昧なものを見極める選択眼を養う訓練も求められる。これは既存のメディア利用と共通する姿勢である。同時に、社会規範を踏まえたコンピュータの利用法を適切に伝授する場も必要なのだが、それさえ現状は整備されているとはいい難い。

以上を踏まえた上でも、さまざまな環境におかれている現職者、利用者、志望者、OB・OGらを含めて生の声が聞ける場は欲しい。地域や勤務先を異にする複数の相手と対話が成り立つ双方向性は、共通の話をしにくい面もあるが、違った観点からコメントできるメリットもある。特定個人の時間を強引に奪う心配をせずに、それらを容易に実現できる通信ネットワークの可能性は、上手に生かさなければもったいないと強く感じる。それには「ネットのためのアーキビスト」も必要だと考えている120。

3-3 受け皿提供の責務

アーキビスト予備軍ながら全史料協会員になれず、各種情報から疎遠な学生たち。アーカイブズに関心をもつ個人の史料の所蔵者。サポート効果の期待は、それら会員外のメンバーだけではない。全史料協の諸行事に容易に参加できない会員をはじめ、産休・育休、介護中の人、転職準備中や療養で離職中の人への間接的な支援ともなる。組織に集中しがちな現場の動向が、自宅に居ながら入手できることは、ほんとうに必要な人や場所へ情報が流れない苛立ちを和らげ、会員外の人がアーキビスト・アーカイブズの情報と接するチャンスを増やすことにもつながっていく。

そういえば、かつて全史料協で期間限定「ファックス相談」を試行したことがあった¹³⁾。今

年度からは「アーカイブズフォーラム」と称 し、全史料協に対する会員内外からの意見、 質問、注文などを掲載し議論する場を『会報』 上で展開する試みもはじまったようだ「文献 31]。その対象を「全史料協」だけに限定・完 結するのではなくて、一歩進める方向で、業 務支援の情報提供とともに、日本のアーキビ スト・アーカイブズ発展のために寄与する場 の提供を、全史料協は常に意識化し、具体的 に実現する責務ある立場にあるのではないだ ろうか。

3-4 私設の場の限界/公設の場の展望

情報提供者に悪意がなくても、ケアレスミ スは起こりうる。JLAの協力開始以前の出来 事だが、震災時に図書館フォーラムで一時情 報が混乱したことがあった[文献17]。これは 非常時だけとは限らない。ネットワーク上に 拡散する情報の集約作業一つをみても、それ は個人の責任やボランティアで実現しえるも のではない。公的な立場でアナウンスしたり、 連絡を出せる場も必要なことも実感しつつあ るが、このことは、業務として組織が参加で きる場かどうかの問題とも密接であろう。

阪神・淡路大震災でホームパーティを利用 した情報交換に関わったことが、筆者の通信 事始めである140。必要な情報をタイムリーに提 供できなかった苦い体験を味わい、「日常にで きないことが非常時にできるわけがない」こ とをその時痛感した150。通信の醍醐味の一つで ある速報性をいかせなかったこと、それも本 稿執筆動機の遠因だ。

ネットワーク利用の情報提供や意見交換は、 はじめは不慣れで時間を費やすかもしれない。 だが月例会や懇親会の席になかなか参加でき ないメンバーでも、無理なく参加し維持でき るゆるやかなつながり=ネットワークである。

通信は手段であり目的ではない。何を望ん で通信を利用するのか。どのように結実して いくか、あるいは消滅してしまうか。情報通 信技術の進展とともに、それは参加者ひとり ひとりのかかわりかた次第だと筆者は思って いる。

(補注) 通信ネットワーク上の情報の場合、 インターネットのURL(Uniform Resouce Locator) に相当するような記述方式が確立し ていない。本稿ではネット上の情報の所在(出 典)を示す場合、古瀬幸広氏が提唱する書式 BRL(BBS Resource Locator)を準用した (詳細は下記drtp参照)。"drtp"とは"Digital Resource Transfer Protocol"の仮名称で、

"drtp://niftyserve.or.jp/fshtext/mes/4 /557"は、BBSアドレス,フォーラム名,会 議室番号(mes/4),発言番号を示す。原則は以 下のとおり:(1)大文字、小文字は区別しない (2) BBSアドレス以下は、メニューツリーの階 層をたどるごとに/を挿入して羅列 (3)登録名 (登録ファイル名) は""で囲む。* BBS= Bulletin Board System

[注]

- 1) WWW (World Wide Web:本文中では Webと略称)は、インターネット上で提供さ れるサービスの一つ。文字情報とともに、グ ラフィカルな画像や音声・動画を同時に送受 信できるのが特徴的な機能。インターネット 上で利用できる情報検索サービスの一翼も担 う。Web上での情報そのもののことを広い意 味で「ホームページ」と呼ぶほか、Webでい ちばん最初に表示されるページのことを指す 場合もある。ロンドン大学が担当する"Archival Repositories on the Internet"は、各国のア ーカイブズや専門団体のWeb上のアクセスポ イントを集約したホームページである「情報 11]。国内外の図書館におけるインターネット の利用状況については文献03・13でも触れてい
- 2) 商用ネットには、PC-VAN(NEC)、People (日本IBM)、ASAHIネット、日経MIX (日 経BP社)、ASCIInet (アスキー) などの大手 商用ネットがあり、そのほとんどがインター ネット接続サービスを実現し、文字情報とと もに画像情報にも対応しはじめている。その ほか、中堅のネット、専門ネット、草の根ネ ットなどの通信ネットがある。「文献21.25]
- 3) 電子会議室はそれぞれのネットワークによ って呼称が異なり、PC-VANの場合は「SIG (Special Interest Group);シグ」と呼ばれて いる。

- 4) ハンドル名という匿名使用の是非については賛否両論ある。インターネット上のNetNews (「ニュースグループ」という単位でテーマごとに存在)という世界規模の電子会議システムを利用して議論する場合のマナーの1つに、自分自身の所属や連絡先などを明らかにすることが挙げられている。ニフティでもフォーラムによっては実名使用を推奨する場がある。
- 5)シスオペは二フティと契約し、フォーラム 運営を委託され、フォーラムの運営に関して 大きな権限が与えられている。例えば、会員 規約に触れるようなメッセージが発生した場 合は削除できる。またフォーラムの運営フォ ローを行うサブシスオペは、シスオペによっ て任命される。
- 6) 通信初心者の多いフォーラムでは、曜日と時間を決めて初心者専用の「リアルタイム会議」を開催し、担当者が操作に関する質問も受ける"事業"を行う場合もある。
- 7) ホームパーティーを設定する場合は、管理者にニフティの基本料金の他に設定料金が掛かる(月額500円、拡張時は2000円。パティオは月額7000円)が、参加者は基本料金のみで利用できる。
- 8) 参加資格が大学図書館関係者限定で、主に レファレンスに関する意見・情報交換、研究 会の事務連絡やメンバーへの質問、提案など を行う「レファレンス友の会」と、大学図書 館に関する同様な内容を扱う「大学図書館員 レター という 2 種類のメーリングリストは、 「レファレンス研究分科会」の有志の一人池 田剛透氏が設立者で、「大学図書館員が何かし らのしがらみを気にせず、自由に情報交換が 出来る場所、大学図書館の発展に寄与するよ うな場所、もっと下って好きなときに図書館 員のコミュニケートできる場所などにできれ ば と思い開設された。図書館員関係のメー リングリストはこれ以外にも存在するようで ある「情報03・04」。個人ホームページの事例 では、図書館の登場する映画のデータベース を公開したホームページなどがある(情報12, 竹村宏氏の御教示による)。
- 9) Walter Henry, "Electronic Lists, Web Sites & Resouce Guides", ABBEY NEWSL., Vol.19-4, Sept.1995, pp.67。これはARCHIVES LIST参加者の一人 ABBEY PUBLICATIONS社(Austin)のE. Mclady氏から富永氏へ送付された資料である。(MLへの参加方法は文献24をはじめ各種ガイドブックを参照されたい。)富永氏が参加するアーキビストのML(ARCHIVES LIST)は合

- 衆国、カナダ、豪州、欧州などから約1800名が参加。水谷長志氏が参加する北米美術図書館協会(ARIS/NA)が開設した美術図書館員のML(ARIS-L)の場合、14ケ国650名が参加するという。それぞれの具体的な利用状況は文献01・03を参照。
- 10) SGML(Standerd Generalized Markup Language)は、デジタル文書の構造を定義し、内容を管理するための企画(ISO8879)。インターネットの多くのWeb文書で使用されている HTMLは、SGMLの一種である(ピーター・ダイアソン著・テクニカルコア訳『最新ネットワーク用語事典 第2版』技術評論社、1996年)。国内でも各種の概説書が刊行されている。「アーキビストのためのSGML(SGML for Archivists)」のホームページ[情報15]には、インターネットにおけるSGML関連サイト/バークレイ検索プロジェクト/SGMLソフト/SGMLマークアップページと資料(以上安澤秀一氏訳、本情報も同氏の御教示)が用意されている。
- 11) 誤解のないように強調しておくが、インタ ーネット上の情報すべてが自由に利用できる というわけではない。Webで提供される情報 にも作成者の著作権がある。copyfree宣言を しているISAD(G)やISARRでも、商用ネット 内のライブラリに置かれて「公表」されると、 ネットワーク管理者の著作権、シスオペや登 録者の著作権 (隣接権) が複雑に絡み合うよ うになる。ホームページ利用の場合はリンク がはれることで、常にオリジナル情報にたど りつけるため、"情報仲介者"処理問題には煩 わされない。Web以外のインターネット利用 でいえば、たとえばメーリングリストは登録 制であるから、その中での情報の取り扱われ 方は、商用ネット内と同様に会員限定の原則 となる。
- 12) 「ネットのためのアーキビスト」という表現は、文献17で兎内氏が提唱した「ネットのための図書館員」にちなむものである。「ネットのための図書館員」とは、図書館フォーラム準備過程で提唱された方向性の一つで、「図書館員が自分たちのために議論したり共同して仕事をする場を持つだけでなく、図書館員としていろいろなフォーラムなどで発言し、そこの文化を豊かにしていけること」だという。本稿執筆にあたり、兎内氏のこの論文からは種々の教示を得た。また、通信利用の有効性について文献02で既述したことは繰り返さなかったので、あわせて参照して欲しい。
- 13) 「史料保存-文章館ファックス・ライン」が、

- 14) 1995年1月22日から3月末まで、阪神・淡路 大震災で被災した博物館・文化財関係の状況 を把握し、復興援助体制を古文化財科学研究 会会員を中心とする有志で考える臨時ホーム パーティが森田恒之氏の提案で設置されてい た。
- 15) 地震発生直後から3月末まで、ニフティ内 には「震災フォーラム」が無料開設され、情 報ボランティアや官公庁・自治体からの震災 関連情報が集められていた。だが歴史資料の 救援活動として通信を有効に利用できたとは いい難く、「歴史資料保全情報ネットワーク(史 料ネット) 開設のお知らせ」を掲示できたの は2月16日であった。文献30で芝氏が指摘され ているように、通信ネットワークでの情報の やりとりは、主に被災地と外部にいる人々の 間でなされたもので、直接被災の被害にあっ た人にはなんの関係もなかった。自立した機 関が独自の判断に基づいて行動できないと、 情報の流通はうまくいかない。ちなみに史料 ネット開設情報は、「情報ボランティアグルー プ | の活動で、掲示・コピーの配布として利 用された。当時文化庁では、地域文化に関す る情報を相互に送受信し利用することを目的 とした通信ネットワーク「地域文化情報シス テム」準備用として、各都道府県の文化行政 担当課・芸術文化関係団体を対象とする「地 域文化フォーラム」が試行されていた(PC-VAN を利用。試行期間は1994年12月8日から1995年 5月 [文献29])。だがどの程度活用されたかは 不明であり、阪神・淡路大震災の時に通信を 活用した事例も確認できなかった。

参考文献

- [01] 富永一也「ネットワークで育てようアーキビスト (梗概)」『第21回全史料協全国大会予稿集』、1995年11月。
- [02] 毛塚万里「自由テーマ研究会1ネット ワークで育てようアーキビスト/研究会報告」 『全史料協会報』No.35、1996年2月。
- [03] 水谷長志「研究ノート 美術館から外 部情報源へアクセスすることーその現状と可能性(その二)インターネットを中心に」『現代の眼』485、1995年4月。
- [04] 水谷長志「ARLISとIFLAのWWWホームページーインターネットの私的な遭遇からー」『アート・ドキュメンテーション通信』 第27号、1995年10月。
- [05] 田良島 哲「史料情報の電子化とオン

- ライン流通に関する諸問題」『古文書研究』40、 1995年3月。
- [06] 『ねあせ通信』第4号、1995年7月・第 5号、1996年7月。
- [07] 『史料保存生活』No30、1996年6月。
- [08] 『アート・ドキュメンテーション通信』 21、1994年4月・29、1996年4月・30、1996年 7月。
- [09] 南 秀幸「図書館員によるパソコン通信:図書館員のHP(ホーム・パーティー)」『図書館雑誌』88-3、1994年3月。
- [10] 「JLA広報をパソコン通信で提供/ NEWS」『図書館雑誌』89-10、1995年10月。
- [11] 「全国図書館大会のWWWサーバを新 潟大学附属図書館で開設/NEWS」『図書館 雑誌』89-10、1995年10月。
- [12] 「JLAの広報をパソコン通信で提供!!/ 日本図書館協会からのお知らせ」『図書館雑誌』 89-11、1995年11月。
- [13] 加藤晃一「インターネットと大学図書館の昨今-自分の仕事をふりかえって-」『図書館雑誌』89-12、1995年12月。
- [14] JLA情報管理委員会パソコン通信ワーキンググループ「パソコン通信入門講座<第1回>パソコン通信とは」『図書館雑誌』90-5、1996年5月。
- [15] JLA情報管理委員会パソコン通信ワーキンググループ「パソコン通信入門講座<第2回>電子会議への招待ーパソコン通信で司書の連帯を!」『図書館雑誌』90-6、1996年6月
- [16] 兎内勇津流「パソコン通信を利用した 図書館事業」『カレント・アウェアネス』、 No.185、1995年1月。
- [18] 千速敏男「学術活動におけるパソコン 通信の効用の一事例/歴電クロニクル」『情報 知識学会ニューズレター』35、1995年12月。

(本稿執筆にあたりdrtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/16/118/を利用した

- [19] 石田文一「NIFTY-serve歴史フォーラムの電子文書館構想」『全史料協会報』37、1996年6月。
- [20] 「マックで挑む新しい自費出版 パソ コン通信でミニコミ誌を配布/FORUM パソ

コン党宣言」『ASAHIパソコン』1995年7月号。

- [21] 『ワープロ/パソコン通信BBS電話帳』1995春号 (電波通信社 1995.6)
- [22] 「文化財情報交換にVAN導入」『朝日 新聞』1992年10月17日夕刊(『文化財発掘出土 情報』92-12 収録)。
- [23] 松井 章 「考古学における共同研究の 方向」 『文化財発掘出土情報』 92-11
- [24] 戸田慎一ほか『インターネットで情報 検索』日外アソシエーツ、1994年11月。
- [25] 「パソコン通信の逆襲-インターネット時代に贈る活用法-」『PC WORK!』1996年2月号
- [26] 藤田正幸「インターネットの社会学」 『人文学と情報処理』No.8 (特集インターネット入門から活用へ)、1995年8月。
- [27] 「社説インターネット社会で閉塞感打破を」『日本経済新聞』1996年1月11日朝刊。
- [28] 「情報格差、図書館で解消 ビル・ゲイツからの電子メール」『日本経済新聞』1996年7月4日朝刊。
- [29] 「パソコン通信ネットワーク地域文化 フォーラムの開設/ACA NEWS」『文化庁月 報』317、1995年2月。
- [30] 芝 勝徳「阪神・淡路大震災とインターネット」『図書館雑誌』89-12、1995年12月。
- [31] 「アーカイブズ・フォーラム」 『全史料協会報』 37、1996年6月。

参考情報 BRL•URL

- [01] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/flearn/lib/6/21
- [02] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/flearn/lib/6/27
- [03] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/ flearn/mes/15/1(1994/09/18)
- [04] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/flearn/mes/15/1967(1995/07/14),2002(1995/07/26)
- [05] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/10/70(1995/05/04)
- [06] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/16/214(1996/06/12)
- [07] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/17/1(1996/04/14)
- [08] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/17/2(1996/04/14)
- [09] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/10/103(1996/02/02)
- [10] BRL: drtp://niftyserve.or.jp/freki/mes/10/104(1996/02/02)

- [11] URL: http://www.ucl.ac.uk/~ucz-cspw/archives.htm)
- [12] URL: http://www.bekkoame.or.jp/~ichimura/libmvdb/libmvdbE.htm)
- [13] URL: http://www.nijl.ac.jp
- [14] URL: http://www.archives.ca/ica/english.html
- [15] URL: http://www.liv.ac.uk/~ar-chives/sgml.htm

(付記) 本稿執筆にあたり、準備段階から木村 邦夫氏、水谷長志氏、森田恒之氏、山岡寛氏 をはじめ、田良島哲氏のパティオやアーキビ ストのホームパーティメンバー諸氏に各種の 協力を得たこと、所定紙数を大幅に超過して の掲載を了解していただけたことに対し、記 して謝意を申し上げます。また本稿で取り上 げたニフティ内の各サイト情報の紹介につい ては関係者からの承諾を得ています。

(1996年7月8日脱稿

E-mail: MXJ01572@niftyserve.or.jp)